

## 〈研究ノート〉

# あるニヴフ人の戦前と戦後

丹菊逸治 TANGIKU Itsuji

- 1 ―― はじめに
- 2 ―― 日本領南樺太と先住諸民族
- 3 ―― 奥田長次と父・奥田桃太郎
- 4 ―― 終戦と日本領ニヴフ人社会の動揺
- 5 ―― ポロナイスクの北方少数民族社会
- 6 ―― 「オタスの杜」の人々
- 7 ―― おわりに：日本への思い

【要旨】サハリン島（樺太）北部の先住民ニヴフ民族は、第二次世界大戦終了まで一部が旧日本領南樺太の住民だった。彼らはウィルタ民族とともに、日本の行政当局が敷香（現ポロナISK）に設置した集住地「オタスの杜」の主要な構成員となり、アイヌ民族とは異なった扱いを受けていた。比較的知られたニヴフ人奥田桃太郎とその息子奥田長次の足跡が表すように、日本に「引き揚げ」ずサハリン島にとどまった旧日本領南樺太のニヴフ民族は北部のニヴフ人社会に再統合された。

## 1 ―― はじめに

筆者は1999年以降ロシア連邦極東地方のサハリン州・ハバロフスク州でニヴフ民族<sup>1)</sup>の伝統文化の調査をしてきた。その過程で、旧日本領南樺太のいわゆる「オタスの杜」出身のニヴフ人、ウィルタ人からも話をうかがうことができた。ここでは、一人のニヴフ人奥田長次氏の生い立ちを紹介するとともに、「オタスの杜」のニヴフ人たちがどのような存在であったのかを考えてみたい。以下本稿では奥田長次氏をはじめとする方々の敬称は略させていただく。

ニヴフ民族はサハリン島北部からアムール川河口にかけた地域（現在のロシア連邦ハバロフスク州北部およびサハリン州に属する）を伝統的居住地域とする少数民族である。民族人口は約5000人<sup>2)</sup>。うち半数強2700人ほどがサハリン島に居住する。民族固有言語ニヴフ語は他に同系統の言語がない孤立した言語であり、アイヌ語ともツングース諸語とも全く異なる。アムール川河口地域とサハリン島北部西海岸ではアムール方言が、サハリン島北部で

はサハリン方言が話されてきた。現在ではロシア語におされて話者が減少しており、流暢な話者はおそらく100名以下である。

アムール地方ではツングース諸民族とサハリン島ではアイヌ民族と隣接し、相互に影響し合ってきた。ニヴフ民族は現在では極東において圧倒的多数を占めるロシア人社会の中の「少数民族」である。だが、かつては決して「少数民族」ではなく、サハリン島北半部のマジョリティ民族だった。北海道のアイヌ民族、あるいは最近少しずつ注目を集めているサハリン島南部のアイヌ民族と同様に、日本とロシアの近代化の過程でマイノリティ化した民族である。さらにニヴフ民族はウィルタ民族とともに、日露に「分断」された歴史を持つ。北海道のアイヌ民族を巡っては今日改めて「多民族共生」の概念のもとにさまざまな試みが始まっている。旧日本領南樺太のウィルタ民族についても、北川ゲンダーヌ（日本名北川源太郎）らに焦点をあてた「第二次世界大戦後日本に『引き揚げ』という形で移住した人々」という視点からのいくつかの報告がなされている<sup>3)</sup>。だが、同一視されがちなサハリン島の諸民族の戦後の境遇には差異が存在した。少なくとも旧日本領南樺太のニヴフ民族の場合、北部（ロシア領内）のニヴフ社会との結びつきが復活する傾向が強かった。本稿でとりあげる奥田長次の事例などがそうである。彼の父奥田桃太郎は旧日本領南樺太のニヴフ人を代表する存在でありたびたび当時の新聞にも取り上げられた。だが、彼は同時にロシア領地域のニヴフ人社会との結びつきを失っていなかった。その息子である奥田長次のアイデンティティは両地域のはざまに揺れ動いてきたが、基本的にはロシア領地域のニヴフ人社会に戻っていったといえよう。本稿で紹介する彼ら親子の足跡は、そのまま旧日本領南樺太のニヴフ人の多くが部分的であれ共有した経験である。本稿では「日本人にとってのオタス」「日本人にとってのニヴフ人」ではなく、「ニヴフ人にとってのオタス」という視点を試みたい。奥田桃太郎については文献資料や関係者の証言、奥田長次については本人へのインタビューを元に行っている。

## 2 ―― 日本領南樺太と先住諸民族

1875年樺太千島交換条約によって日本はサハリン島を放棄、千島列島全域の領有権を確認した。このとき、サハリン島のアイヌ人口の約3分の1にあたる841人が日本に移住している。当初の約束ではサハリン島対岸にあたる宗谷地方に居住できるはずだったが、日本政府は宗谷からさらに内陸の石狩地方対雁に強制的に移住させた。その結果慣れない気候のせいもあり、多数の病死者が出た。彼らの生存者および子孫の多くが後にサハリン島に帰還した。いわゆる「対雁アイヌ」である。その後、日露戦争中の1905年に日本軍はサハリン全島を占領し、ポーツマス条約で同島の北緯50度以南をロシアに割譲させた。その結果サハリン島南部は1905年～1945年の間「日本領樺太」となった（以下本稿ではこの地域を「旧日本領南樺太」と呼ぶ）。サハリン島の北半はニヴフ人、南半はアイヌ人の伝統的居住地域であり、同条約の結果北緯50度線にひかれた日露国境は両民族の境界におおまかに一致

したものではあった。だがニヴフ民族およびウィルタ民族は50度線以南にも居住していた。そのため北部に主要な人口を要するニヴフ民族、北部と中部に住むウィルタ民族の居住地域を国境が分断する形となった。その結果日本領側にウィルタ人の半数ほどにあたる数百名と、ニヴフ人のおそらく100名ほどが住むことになった<sup>4)</sup>。

当時の旧日本領南樺太におけるアイヌ民族、ニヴフ民族・ウィルタ民族など先住民の国籍のあつかいはあいまいであった<sup>5)</sup>。北海道からの帰還者である「対雁アイヌ」以外の先住民は戸籍がないまま日本領内に住むことになった。旧日本領南樺太のアイヌ民族には1933年に戸籍制度が施行されたが、ニヴフ民族・ウィルタ民族に対しては戸籍制度が施行されないまま終戦をむかえた。「原住民人名簿」が戸籍の代用とされていたといわれているが、その名簿の法的扱いについてははっきりしない。戦時中に北川ゲンダーヌに対して行われた「召集」は戦後の裁判で無効とされ、彼は正規の軍属とは認められなかった。日本政府の見解は旧日本領南樺太の先住民は当時「日本国籍を有しない日本人であった」というものである<sup>6)</sup>。実際、戦後のウィルタ民族の「引き揚げ」に対しては日本政府は比較的簡単に戸籍の「就籍」を認めている。

彼らは1920年代には比較的自由に国境を越えて往来していた。また、北部においても1919年以降サハリン島北部での油田開発は日露が共同で調査を行い、1925年の日ソ基本条約では日本が北部東海岸の石油採掘権を得た。この地域には清帝国時代からの有力な集落「チャイヴォ」を中心とする海岸地域のニヴフ人グループが居住しており、油田開発のために来た日本人商人との間で商取引が始まっていた<sup>7)</sup>。

サハリン島先住諸民族は、日本とロシアの狭間で生き残りを図っていた。日露双方にとってアイヌ民族を味方につけることは戦略上重要であり、アイヌ民族としてもそれを利用するしかない。日露戦争に際してもサハリン島先住諸民族の動きは活発だった。サハリン島のアイヌ人の中には日本軍に協力した者もいた<sup>8)</sup>。日露戦争後の日本軍による占領下の1905～6年頃、東海岸一帯に影響力があつたアイヌ人指導者バフンケ（木村愛吉）、千徳太郎治らアイヌ人は東京の様子を探るとともに、ポロナイスクのウィルタ人（とおそらくニヴフ人）と協議をしている<sup>9)</sup>。そして民族学者ブロニスラウ・ピウスツキに手紙を送り、ロシア領内（サハリン島西海岸北部あるいはカムチャツカ半島）に漁業を確保できないかと相談している<sup>10)</sup>。日本人（和人）に漁場を奪われたためであった。その後アイヌ人集落は行政当局によって再編され、漁場は完全には復活されなかったものの、いくつかの漁場が割り当てられた<sup>11)</sup>。

### 3—— 奥田長次と父・奥田桃太郎

オクダ・チョウジ（奥田長次）は1936年生まれ。コルサコフ（当時の大泊管区）皆別（ミナベツ）出身。男性。ポロナイスク在住。ニヴフ伝統社会の制度である「カル」（いわゆる「氏族」だが、本稿では「集団」と訳しておく）はケヌヴン。旧日本領南樺太の生まれで「奥

田長次」という日本名をそのまま名乗っている。ニヴフ名はない。パスポートに記載された姓名の表記はОкуда Чёо Днであるが、これは登録担当者が朝鮮名風の区切りをしたためであろう<sup>12)</sup>。彼自身は「奥田長次」という漢字表記と「オクダ チョウジ」という発音を記憶している。ロシア語の通名は「ニコライ」(コーリャ)。「オクダ」のクからの連想であろう。

彼の父は奥田桃太郎(おくだ ももたろう)、ニヴフ名はプニヨン<sup>13)</sup>。「天皇陛下に拝謁しに行ったニヴフ人」として知られている<sup>14)</sup>。山本祐弘によると彼は1893年ポロナイスク近郊のオタスで生まれた<sup>15)</sup>。1919年～1920年にはサハリン島北部に滞在している。ひょっとしたら縁故があったのかもしれない。彼の属するケヌヴン集団はトゥミ川中流方面からポロナイスク方面に移動してきたと伝えられている。ポロナイ川流域には古い交易拠点「タライカ」があり、過去数百年にわたりアイヌ人、ウィルタ人、ニヴフ人が次々移住してきた。ニヴフ人たちはそのもっとも新しいグループと考えられている。現在ではケヌヴン集団を名乗るニヴフ人はトゥミ川流域にいないが、当時はまだ残っていた可能性もある。

当時すでに日本領とロシア領との間には国境線があったが、奥田長次が聞いていたところによると1931年までは比較的自由に往来が出来た。そして国境が「閉鎖」される直前の1928年、奥田桃太郎はトゥミ川中流域の有力者パルクジン<sup>16)</sup>の妹トイグシュク<sup>17)</sup>(1897年生まれ)を妻として迎えた。彼女は飛行機でポロナイスクに来たというが、それは当時としては贅沢なことだったにちがいない。彼女の日本名は「ハルコ」といった<sup>18)</sup>。奥田長次の記憶では彼女は日本語が達者だったという。当時のトゥミ川流域のニヴフ人の間に日本語が普及していた形跡はない。おそらく結婚後短期間で習得したのであろう。奥田桃太郎にはアイヌ人女性の妻とニヴフ人女性の妻がいたが、1928年の時点でアイヌ人女性の妻は娘を1人残して亡くなっていた<sup>19)</sup>。このニヴフ人女性がトイグシュクであろう<sup>20)</sup>。樺太を領有した日本政府は1926年頃、ポロナイスク近郊の北方少数民族を集めてオタスに移住させた。サハリン島北部でソビエト政権が行った集住化(コルホーズ化)政策と同様である。ただしコルホーズとは異なり、オタスは「オタスの杜」と呼ばれる観光拠点にもなっていた。オタスではウィルタ人が多数を占め、ニヴフ人は少なかった<sup>21)</sup>。そして実質的にオタスを取り仕切っていたのは、ウィルタ人でもニヴフ人でもなく、ロシア領出身で1926年にオタスに来た(そして交易拠点を築いた)「トナカイ王」の異名を持つサハ人商人ヴィノクロフだった<sup>22)</sup>。

オタスではウィルタ人、ニヴフ人たちはそれぞれの地区に固まって住んでいた。そしてそれぞれに「総代」と呼ばれる代表者が任命されていた。だが伝統的ニヴフ人社会には数十人を取りまとめるような指導者は存在しなかったため、総代の指示には誰も従わなかったようである。1944年には上村力太郎(ホニャッカ)がオタスの総代であった<sup>23)</sup>。オタス以外の集落にも総代はいたらしい。1923年には保恵では「ボーコン」という59歳の男性が総代をしており、当時31歳の奥田桃太郎が副総代だったという<sup>24)</sup>。ボーコンと奥田桃太郎はともにケヌヴン集団出身だが、近い血縁関係はない。

奥田桃太郎の出身集団「ケヌヴン」が名乗る日本名は通常は「上村 (かみむら)」である。「ケヌヴン」というのはニヴフ語で「上流の住人」を意味し、そこから翻訳して作られたのが「上村」姓である。つまりケヌヴン集団の者は全員、自動的に「上村」という日本名を名乗ることになる。このやり方は旧日本領南樺太の他のカル集団やウィルタ民族についても同様である。旧日本領南樺太の北方少数民族の場合、集団名と関係なく任意の姓が創出されるということはほとんどなかった。だが、奥田桃太郎はしばしば「上村」ではなく「奥田」を名乗っていた。彼自身が使い分けていたかどうかは明確ではないが、新聞や行政資料では「奥田」、民族学者の資料では「上村」と記されている。奥田長次は自分の姓を一貫して「奥田」と記憶しているが、自分たちが上村というカル集団 (ロシア語で「род ロード」と呼ぶ) に属しているとも聞いている。つまり、「奥田」は上村というカル集団の一部が新たに創出した姓である。桃太郎の兄オクチョが自分のニヴフ名からオクの音をとって作り出したものではないかと推測する。同じような例として「宝部 (タカラベ)」の一部が個人名カシッペから「加藤 (かとう)」という姓を作り出しているらしい。しかし、そもそもなぜ新たに姓を創出する必要が生じたのかは不明である。外部と接触することが多いニヴフ人の中には日本の「姓」がニヴフ社会のカル集団よりも小さなグループであることに気づき、それに合わせようとしたのかもしれない。

奥田桃太郎は一ヶ所にとどまっていられない性分だったらしい。現在でもポロナイスクのニヴフ人たちの間では彼は「放浪者」だったと伝えられている。奥田長次の幼少時代には、奥田桃太郎は妻を連れてコルサコフ (当時の大泊) 近郊の「ミナオシ」 (皆岸?) という村の海辺に家を建てて住んでいた。奥田長次がそこで生まれた。

あるとき、まだ赤子だった彼を連れたトイグシュクが吹雪の中で道に迷ったことがあった。そのとき、1人の「サムライ」が助けてくれたという。彼は赤子を懐に入れ、トイグシュクの手を引いて家まで送り届けた。そして赤子に「長く生きるように」と「長次」の名を付けた。その「サムライ」は泥棒であり、北海道で逃走中に橋を落として4人も死なせてしまい、サハリン島まで逃げてきたのだという。なお、奥田長次にはすでに兄のシロウがいたために「次」がとめ字となったのであろう。また、ミナオシ時代には近くの「チチニ」 (皆別近郊だという) 滞在中に妹のヒデコが生まれている。

近所には奥田桃太郎一家のほかにニヴフ人の中村アジガン夫妻、フムジン (ロシア名ワシリ) がいた。2人は1935年頃にサハリン島北部から「移されて来た」という。詳しい事情はよく分からない。中村アジガンの妻ムングクはウィルタ人だった。彼らはそこで海獣を撃って暮していた。大量に獲ったアザラシの毛皮を、近くに住む毛皮商人の日本人 (和人) に売っていたのである。奥田桃太郎は最新式のウィンチェスター銃を使用していた。ニヴフ人社会では女性が狩猟をすることはタブーだったので、トイグシュクは銃を使わなかった。だがムングクはウィルタ人だったので小型の銃を持ち、夫婦でアザラシ撃ちをしていたという。また、付近は優良な漁場でありマスがよく獲れた。タコや貝もよくうちあげられていて食料には困らなかった。マスを狙って近くに日本人 (和人) も住んでいた。



奥田桃太郎はミナオシ、コルサコフ、ポロナイスクの間をひんぱんに行ったり来たりしていた。1944年にはいったん家族を連れてポロナイスクに移ったが、すぐにミナオシに戻った。そして終戦直前には単身でポロナイスクに滞在していた。すでに1940年にヴィノクロフは病死していた<sup>25)</sup>。1945年にはミナオシのトイグシュク（ハルコ）のもとに「奥田桃太郎が死んだ」という知らせが入り、彼女は奥田長次を連れてポロナイスクに向かった。

奥田長次は父の死について詳しいことは知らない。日本側資料によれば終戦の2日後、1945年8月17日にオタスで狙撃されて死んだとされる。彼は毛皮の外套を被せて埋葬された（これはニヴフ式の正式の葬儀ではない。ケヌヴン集団は伝統的に死者を火葬にする）。

彼の死の日付には別の情報もある。ポロナイスクでの聞き取り調査によると、終戦直後の1945年8月20日にウィルタ人の一部がユジノサハリンスク（当時の豊原）に向かった。日本に向かう脱出船に乗るためである。だが「日本国籍を有するものしか乗せられない」と乗船を拒否され、徒歩で戻って来た。当時のウィルタ人・ニヴフ人には「戸籍」がなく、従って国籍の証明が出来なかったためである。彼らがオタスに戻ったのが8月23日<sup>26)</sup>、そのときには奥田桃太郎はすでに殺されていた。つまり彼は8月20日にはまだ生存しており、23日までの間に死んだということになる。いずれにしても奥田桃太郎の死には謎が残る。彼が日本軍に銃殺されたという噂が今でも根強く残っている。

奥田桃太郎については、さまざまなことがいわれている。まず、拓殖博覧会で東京を訪れ「天皇に拝謁した唯一のニヴフ人」として語り継がれている。また、日ソ両軍が動向を把握しようとした「大物」として「日ソ軍のどちらかの『スパイ』だったのではないか」ともいわれている。だが、そういった見方はいずれも日本とロシアの体制側からの視点といわざるをえない。

奥田桃太郎は最終的に保恵の総代を務めていた。当時は彼よりも年上の者がまだ存命だったはずである。彼らを差し置いて奥田桃太郎が総代となったひとつの理由は、彼が流暢な日本語を話し、拓殖博覧会に参加していたことであろう。当時「内地」を直接知っているニヴフ人は少なかった。また、彼の人脈はサハリン島中に広がっていた。彼は20代後半の頃に少なくとも2度、サハリン島北部を訪れている<sup>27)</sup>。その後もトゥミ川流域のニヴフ人社会と継続的に連絡をとっていた可能性は高い。だからこそトゥミ川流域の有力者の妹を妻にできたのであろう。また最初の妻はアイヌ人であるが<sup>28)</sup>、これもアイヌ人社会との結びつきを示唆する。

夫・奥田桃太郎の死後、トイグシュクは日本へは行かなかった。彼女の血縁者（同一カル集団の所属者）はみなトゥミ川流域に住んでいる。日本に行ったところで頼れる親族は誰もいない。とはいえ、サハリン島に残ってもやはり生活は困難だった。男女の分業がはっきりしている当時のニヴフ人社会では母子家庭だけでやっていくことは事実上不可能であった。だが、再婚しようにも相手となるべきニヴフ人男性がいなかった。ウィルタ人・ニヴフ人男性が逮捕・処刑されたのはオタスだけではなかった。サハリン島全土で少数民族の男性が姿を消していた。当時夫を亡くしたほかの多くのポロナイスクのニヴフ人女性と同じく、

トイグシュクは幼い娘ヒデコを連れて朝鮮人男性と再婚した。奥田長次はチルウンヴドの叔父（トイグシュクの実兄）パルクジンの元に預けられた。なぜトイグシュクがヒデコだけを連れ、長次を預けたのかはよく分らない。背景にはニヴフ民族の伝統的な婚姻制度があったのかもしれない<sup>29)</sup>。あるいは女性であるヒデコは朝鮮人として育ててもよいが、男性である長次はニヴフ人として育てられるべきだと考えたのかもしれない<sup>30)</sup>。トイグシュクは1972年に亡くなった。

こうして奥田長次は9歳以降はチルウンヴドで育てられた。彼は当時全くロシア語が話せなかった。したがって、チルウンヴドに移ってしばらくはニヴフ語だけで暮していたはずである。彼はミナオシ時代にはニヴフ語でなく日本語で話していた記憶がある、という。だがそれは必ずしもあてにならないであろう。彼だけではない。ニヴフ語を理解できるのに「ニヴフ語は全く使ったことがない」と主張する話者は複数存在する。彼らにしてみれば「ニヴフ語を使っていた記憶がない」のだが、実際には使っていたのである。奥田長次の場合もいろいろ聞いてみると、ミナオシ時代にはニヴフ語を使用していたとしか考えられない。いずれにしてもチルウンヴドに移った当初、彼が知っていた言語で通用するのはニヴフ語だけだった。もしも彼のニヴフ語運用能力がその時点では不十分なものだったとしても、その後短期間で間違いなく向上したはずである<sup>31)</sup>。

両親のいない彼はチルウンヴドではあまり良い思い出がなかったらしい。やがて1963年にトゥミ川河口地域のコルホーズがノグリキに統合されると、彼もノグリキに移った。彼は漁業技術者として働いたが、日本領樺太の生まれでしかも日本名を持つために、「敵国のスパイではないか」という偏見の対象となることもあったという。その当時の事情について彼はあまり多くを語ろうとしない。

#### 4 ― 終戦と日本領ニヴフ人社会の動揺

終戦後、サハリン島の「日本人」たちは北海道以南へ「引き揚げ」ることになった。アイヌ人たちは彼ら日本人（和人）と一緒に「引き揚げ」ることを選んだ。オタスのウィルタ人・ニヴフ人たちも終戦直後の混乱時にはともかく、日ソ間の合意成立後には事実上他の日本人と同様に引き揚げが可能だった<sup>32)</sup>。だが彼らは当初は必ずしもサハリン島を後にするつもりはなかったようである。アイヌ人とは異なり、ウィルタ人もニヴフ人も北部に同じ民族が多数暮している。「オタス」はそこからわずか15年間ほど切り離されていただけであった。また、ある程度は集落単位で去就を選択したアイヌ人と異なり、「オタス全体での選択」というものはなかったようである。そういった大規模な集団行動は、ウィルタ社会にもニヴフ社会にも馴染まなかったのかもしれない。終戦前の疎開船で「内地」に脱出した者も少数いたが、多くのニヴフ人は終戦後もオタスにとどまろうとしたふしがある。だが、戦闘が終結すると、ソビエト軍はウィルタ人やニヴフ人の男性たちを逮捕して収容所に送り始めた。しかもそのことは残された家族には知らされなかった。そのため、彼ら

の中には行方不明者がいずれ日本に向かうと考え、「引き揚げ」ることにしたものもいたらしい<sup>33)</sup>。また、そのうちに「男性たちが逮捕された」という噂が伝わってくると、残された者たちの一部は恐怖に駆られてサハリン島を脱出しようとした<sup>34)</sup>。

収容所に送られたものの多くは銃殺された。そして幸運にも収容所から生きて帰れた男性たちの多くは家族とともにサハリン島を後にして「引き揚げ」る道を選んだ。また、少数ながら「国外追放処分」になった者もいた<sup>35)</sup>。こうしてオタスのウィルタ人・ニヴフ人の多くが故郷を去ることになった。終戦時にポロナиск（当時の敷香町市街）は放火され、そのときに戸籍が焼失したため、サハリン島からの「引き揚げ」については分からないことが多い<sup>36)</sup>。実際にどれだけのウィルタ人・ニヴフ人が北海道以南に引き揚げたのかは不明である。1990年代になって収容所に関する資料が一部公開され、ある程度のことが分かるようになってきている。

## 5 ― ポロナискの北方少数民族社会

奥田長次が北部ノグリキに滞在している間に、旧日本領南樺太も大きく変化していた。サハリン島東海岸北端の中核都市敷香（しすか）町は戦後ポロナискと呼ばれるようになった。いわゆる「日本人」たちが去った後、コリアン、ウィルタ人、ニヴフ人たちは新しく移住してきたロシア人とともに生きるようになった。彼らは「日本人」ではなくそれぞれの民族として識別され、地域社会は再編された<sup>37)</sup>。基本的には彼らは日本人（和人）が残した漁業の継承者として位置づけられた<sup>38)</sup>。さらに労働力不足を補うためにソ連当局の意向で1940年代後半にアムール地方から多数のナーナイ人が移住してきた。だが、一方でコリアンやナーナイ人と異なり、ウィルタ人とニヴフ人は国籍未確定とされ続け、その状態が解消されてロシア国籍が認められたのは1970年代のことであった<sup>39)</sup>。

一方、日本に渡ったウィルタ人・ニヴフ人たちの多くは経済的に困窮していた。「引き揚げ」た当初は北海道内の数ヵ所に固まって暮っていたが、若い世代は職を求めて日本各地に散って行った。彼らの一部は1950～60年代にかけてニヴフ伝統音楽の公演を数回行っている。おそらくは離散家族を探すためだったと思われる。だが、中心となっていたニヴフ人女性中村千代が1969年に亡くなるとその活動は途絶えた。

1970年代後半になると、日本ではポロナискから「引き揚げ」たウィルタ人ゲンダーヌ（北川源太郎）と日本の田中了らが北海道で「ウィルタ協会」を結成した。彼らは網走とポロナискを結んで国境を越えた交流を始めていた。日本側のニヴフ人たちの多くは沈黙していたが、ポロナискではニヴフ人たちも参加していた。だが奥田長次はほとんどその活動には参加していなかった。彼の近親者は日本に移住していたのだが、彼自身はそのことを知らなかったのである<sup>40)</sup>。

1990年代になってソビエト連邦が崩壊すると、ポロナискの民族音楽団「メンゲーメ・イルガ（銀の模様）」が活動を本格化する。これは現在まで継続している、サハリン州



でも珍しい複数の民族の合同の民族音楽団である<sup>41)</sup>。新設されたポロナイスク博物館では館長をはじめ館員にニヴフ人、ウィルタ人が参加し、おくれらせながらも北方少数民族の復権が始まった。この頃、農業の不振とともに経済状況が思わしくなくなったチルウンヴドからは、州都ユジノサハリンスクだけでなく周辺のノグリキやポロナイスクに移住するニヴフ人が出始めた。

同時に、日本はもはや必ずしも「敵国」ではなくなった。奥田長次は当時としては高価なソニー製短波ラジオを入手し、日本語の勉強を始めた。また、その頃に文化伝承活動家ライサ・アグミナの原稿の編集（ニヴフ語表記の整理）を行うようになったらしい。彼はニヴフ語の表記法を自分自身で試行錯誤して開発した。既存の正書法を採用することはなかった。彼は自分を「スパイ」扱いしたロシア人とロシア当局に対しては警戒感を持っており、そのため当局公認の正書法に対しても不信感を抱いていたのかもしれない<sup>42)</sup>。また、彼は自分の名前が表に出ることを嫌った。彼はアグミナの作品にほとんど共著といって良いほど全面的に協力した形跡がある。挿絵の下絵も彼自身のものであった。だが、彼は彼自身に注目が集まることを注意深く避けた。アグミナの名はそれなりに有名になったが、周囲の人々は奥田長次がニヴフ語を話せるかどうかさえ知らなかった<sup>43)</sup>。

彼がむしろ裏方に回ろうとしているのは、ひとつには創作活動の方向性にもよっている。アグミナの話は伝統的なストーリーにもとづいてはいないものの、ニヴフ的幻想性に満ちている。彼はそんなアグミナの創造力を高く評価している。だが、彼自身はそういった幻想的なイマジネーションを自分の作業からは意図的に排除している。彼は伝統的なニヴフ文化やその世界観をよく知っている。例えば彼はニヴフ語「クス」が単なる「幸運」ではなく一種の人格神だと考えられていたことを知っている。あるいはまた昔のニヴフ人たちが、小さな悪魔のような超自然的な存在を信じていたことを知っている。こういった知識は今では伝承されていること自体がまれである。しかも彼の知識はおそらく父・奥田桃太郎から伝承したものであり、極めて珍しいポロナイスク（あるいは保恵）の伝承資料である。そして服部健ら日本領時代の研究者がポロナイスク出身者からの調査にもとづいて行った記述を検証するほとんど唯一の資料でもある。だが、彼自身はそういった自分より以前の世代から受け継いだ知識を「真実ではない」「一種の幻想」だとみなしている。彼は極めて近代合理主義的な観念の持ち主である。

アグミナの著作への協力の傍ら、彼自身もニヴフ語に関する記録作業を始めている。彼は最近「ニヴフ語イラスト辞典」の作成に着手した。彼はすでにアグミナの物語集の挿絵の下絵を描いている。子どもたちの学習用のイラスト辞典としてはガッシロヴァの作成したノグリキの下位方言による Гашилова (2003) が存在するが、彼が取りかかった頃にはまだ出版されていなかった。彼はまた、ニヴフ伝統民具の復元作業を行うようになった。現在ではサハリン方言地域では珍しい男性の伝統文化の継承運動の活動家である。北海道斜里町立知床博物館に民具一式が収蔵されている。

彼は2000年代になるとノグリキを去り、チルウンヴドを経てポロナイスクに居を移した。

同地の最古参のニヴフ語・ニヴフ文化伝承者として、州都ユジノサハリンスクにある国立サハリン州博物館および、ポロナISK郷土資料博物館に協力を続けている。

## 6——「オタスの杜」の人々。

「オタスの杜」は日本領内における、北方少数民族への同化政策を象徴する集落だった。ロシアにおいて小集落がコルホーズに統合されていったのと同じように、日本領内に散在していた小集落はオタスに統合された。それはニヴフ民族、ウィルタ民族の伝統社会を大きく変化させる出来事だった。だが、ポロナISKのニヴフ人社会は大きく変化しながらも、基本的に外部のニヴフ人社会との連続性を失わなかった。他民族と隣接し、あるいはより緊密な関係を持ちつつも、ニヴフ民族の伝統的な社会制度を基本に対応してきた。おそらく集落の統合以上に大きな影響を与えたのは国境の封鎖であり、それによって「オタスの杜」はロシア領内のニヴフ民族共同体から隔離されることとなった。

ポロナISKはコリアンの多い地域である。奥田長次の母ハルコのように、戦争で夫を失ったニヴフ人女性の多くがコリアンと再婚した。そのために他地域に比較するとコリアン文化からの影響が強く、事実上コリアン社会と「つながった」状態になっている。また「オタスの杜」のニヴフ人たちは、終戦まではまぎれもなく日本国民として暮らしていたのであり、そのアイデンティティはさまざまところに影響を残している。現在のポロナISKのニヴフ人社会には、箸を使う食文化、コリアン文化との共存、ウィルタ民族とニヴフ民族の結びつきの強さなど他の地域とは異なる部分がある。

だが、ニヴフ人社会においては伝統的に「嫁」に出した女性に対し出身カル集団が庇護の義務を持つ。したがって「コリアンと再婚したニヴフ人女性」たちもニヴフ人同士のつながりを失わなかった。また、サハリン島のコリアン社会、その外側を覆うロシア社会も彼らの出自の隠蔽を求めたりしなかった。その点では、移住ニヴフ人たちが自らの民族アイデンティティを隠さざるを得なかった日本社会とは異なる。

奥田桃太郎・奥田長次親子の足跡は日本領時代とロシア時代の世代の、そして「オタスの杜」と他の地域の、それぞれの間にまたがっている。奥田長次の体験は彼の上と下の世代それぞれと部分的に重なる。それは日本領に切り離された「オタスの杜」のニヴフ人たちが、「サハリン島北部のニヴフ人社会」と再統合される過程そのものであった。

## 7—— おわりに：日本への思い

奥田長次は日本を訪問してみたいと思っている。父・桃太郎はじめ、日本領樺太に暮らしていたニヴフ人が「祖国」と考えていた日本、多くのニヴフ人が移住していった日本を一度でいいから訪れたい、というのが彼の願いである。彼はいわゆる「残留孤児」にあたる。だが、今までのところ関係機関からの回答は、彼が奥田桃太郎の息子であるという「証拠

の書類」を提出せよ、というものだった。残念ながらそのような書類は存在しない。だが、ニヴフ人社会で「他人に成りすます」など不可能だし、彼の証言、周囲の人間の証言から彼が「奥田桃太郎の息子」だということは明白である。彼の希望が叶えられるよう願ってやまない。

#### 《注》

- 1) 本稿中の民族呼称については原則として民族自称の発音または表記に近いカタカナ表記とした。それとは別に公的な民族自称がある場合はそれにもとづいた。民族集団をさす場合は基本的に「～民族」、個人を指す場合は「～人」と表記する。

(1) 「日本人」「和人」という呼称について。

日本国家のマジョリティを占める民族については基本的に「日本人」と表記し、他の民族と明確に区別する必要があるときのみ「和人」とした。「和人」(わじん)というのは北海道においてアイヌ民族が日本語で「アイヌ民族以外の日本人」を指す言葉であり、北海道史においても一般的に用いられる。アイヌ語の「sisam シサム」(北海道方言)「siisan シーサン」(サハリン方言)にはほぼ対応する日本語である。旧日本領南樺太出身のニヴフ人やウイльта人もアイヌ語と同系統の「sizm スイズム」(ニヴフ語)「sisa シシャ」(ウイльта語)などの語を用いるものの、それに対応する日本語「和人」はほとんど用いず、代わりに「日本人」を用いる。

(2) 「ニヴフ」という呼称について。

ニヴフ民族は現在は民族固有言語のアムール方言形で「人間」を指すnivx ニヴフ(ロシア文字表記ではнивх)を民族自称としている。本稿で取り上げた地域の方言であるサハリン方言においてはニヴフではなく、nivη ニヴン～niyvη ニグヴンという語形である。したがって同地域において「ニヴフ」はあくまでロシア語文内で用いられる語形であり、ニヴフ語文内ではニヴンあるいはニグヴンと発話される。だが、本稿ではロシア語公文書で用いられる民族自称であることから「ニヴフ」を用いることにした。ロシア語ではおそらくツングース諸語から借用された「ギリヤーク」という呼称のほうが一般的には知られてきた。欧米ではこの呼称が現在でも用いられることが多い。だが、アムール地方のロシア人の間では「ギリヤーク」という呼称が指す範囲は、ニヴフ民族に隣接し文化的共通性の高いウリチ民族(ツングース系言語を話す)も含むことが多く、現在の民族単位と必ずしも一致するわけではない。また「ギリヤーク」という呼称は、少なくとも現在のハバロフスク州・サハリン州においては侮蔑的ニュアンスを含むものとみなされることが多い。日本では明治以前よりアイヌ語経由で「ニクブン」という呼称が知られていたが、その後おそらくロシア語などにならない「ギリヤーク」(あるいはギリヤク、ギリヤックなど)という呼称を用いるようになった。現在ではほとんどの場合「ニヴフ」「ニブフ」あるいはロシア語での複数形нивхи ニヴヒ(ニブヒ)という呼称が用いられる。

(3) 「アイヌ」という呼称について。

「アイヌ」はアイヌ民族の固有言語であるアイヌ語で「人間」という意味の単語である。したがって『アイヌ人』は冗長表現である」という批判がある。アイヌ民族自身の間でもたんに「アイヌ」もしくは「アイヌ民族」という呼称を好む場合がある。だが、異言語間での冗長表現は珍しい現象でなく、また冗長表現自体を避ける根拠も特にないと思われる。どのような呼称が定着していくかは今後の推移によるが、本稿では「ニヴフ人」などの表記にあわせた。

(4) 「ウイльта」という呼称について。

「ウイльта」あるいは「ウイльта」は民族固有言語による民族自称である。その単語の語頭の音節は aisi アイシ「黄金」のアイなどと同じく二重母音である。ロシア語ではульта、ультаと表記

されることが多いが、ウィルタ語の正書法によれば *уилта* である。カタカナ表記は「二重母音をどう表記するか」によって「ウィルタ」と「ウイлта」の両方の表記がありうる。アイシと表記する立場からは前者が、アイシと表記する立場からは後者が使用されるであろう。ウィルタ語の専門家池上二良はじめ言語学者は一貫して「ウイлта」と表記している。民族学者も同様でたとえば北方民族博物館（1995）でやはり「ウイлта」と表記している。一方、第二次世界大戦後ウィルタ人北川ゲンダーヌが参加して結成され「オロッコ」という呼称を「ウィルタ」に改めるよう運動を続けてきた団体は「ウィルタ協会」である。本稿では現代人間学部紀要編集委員会の意向にしたがい、より一般的な「ウィルタ」と表記した。

(5)「コリアン」という呼称について。

サハリン島には韓国・朝鮮民主主義人民共和国のマジョリティと同じ民族が居住している。この民族の「民族自称」については様々な立場がありうるが、サハリン島においてはロシア語による「Корейцы」が用いられている。本稿では「民族固有語による自称十民族」という原則からは外れるが、同系統でより一般的に通用すると思われる「コリアン」の呼称を用いた。

- 2) 2002年ロシア国勢調査によれば5162人。
- 3) 田中了・D・ゲンダーヌ（1978）は北川ゲンダーヌに焦点をあてている。また最近では上原善広（2010）などがやはり「オタスの杜」出身者に関するルポルタージュを発表している。田中了はその後、北部のニヴフ民族にも視野を広げている。
- 4) 条約締結時にどれだけの人数がいたのか明確ではない。現在の聞き取り調査から推測しても、その後しばらくはかなり自由に移動していた可能性が高いからである。ニヴフ人もウィルタ人も伝統的にはロシア人や日本人とは異なる移動路を利用しており、行政当局が彼らの移動を完全に把握できたとは考えられない。
- 5) 田村正人（2002）の指摘によれば、1908年には旧日本領南樺太にいた中国人・コリアンなどの「清韓人」が外国人として扱われたのに対しニヴフ人の扱いはそれとは異なるものの明確ではなかった。なお樺太千島交換条約以降日露間で交わされた取り決めでも先住民の国籍についてはあいまいであった。
- 6) 北川ゲンダーヌの軍人恩給に関する一連の国会答弁において、1976年5月13日に植木光教総理府総務長官（当時）が「アイヌ、ニヴフ、ウィルタ民族は戦前から日本国民であり、戦後の樺太の領土権放棄によっても国籍に変動はなかった」（第77回国会参議院内閣委員会会議録第四号）、1977年4月7日に原孝夫厚生省援護局長（当時）が「北川さんは戸籍法による戸籍を持っていないが、日本人であるということについては間違いはない。したがって、国籍上の要件としては問題ない」（第80回参議院内閣委員会会議録第17号）と発言している。つまり少なくとも戦後には、「法律が施行されていないので戸籍も国籍も作成されていなかったが『広義の国籍』（共産党の小笠原貞子参議院議員の質問から）はあった」とみなされたことになる。
- 7) この取引については現在まで語り伝えられている。
- 8) 丹菊逸治・荻原眞子（2001）の千徳太郎治の書簡には日本による占領への不安が語られている。一方、山辺安之助（1913）では日本軍への協力が武勇談的に語られている。田村正人（2008）はロシアとの関係が深かった前者と、日本との関係が深かった後者の間にスタンスの違いがあった可能性を指摘している。
- 9) 丹菊逸治・荻原眞子（2001）p219-220。詳細は不明だが、千徳太郎治がピウスツキ宛てにキリル文字で書いたアイヌ語書簡に軽くふれられている。おそらくこれと関係するのが、田村正人（2008）が指摘しているバフンケ（木村愛吉）とウィルタ人・ニヴフ人指導者合同による漁場に関する請願である。これは葛西猛千代（1928）でふれられているものだが、正確な時期が不明である。
- 10) 丹菊逸治・荻原眞子（2001）p199。千徳太郎治からピウスツキに宛てた書簡によれば、バフンケ（木

村愛吉)は自らの経営していた漁場を日本人に奪われてしまっていた。

- 11) 樺太において部分的に復活したアイヌ民族の漁場に関しては田村正人 (2002)、樺太アイヌ史研究会 (1992) に詳しい。それによれば東海岸における漁場の再編は基本的には和人の利益を優先したものであった。
- 12) 旧日本領南樺太出身者はサハリン残留コリアンとの結婚により朝鮮名を名乗ることが多かった。そのために混同されたのであろう。
- 13) ニヴフ名は日本側に残された資料ではプニオン、プニヨン、プキイヨンなどと表記されている。現在のサハリンでも複数の語形が伝えられており正確には分らないが、おそらく *punijon* プニヨンだったと思われる。
- 14) 奥田桃太郎は1912年に東京で開催された拓殖博覧会に招かれ「ギリヤック人」(＝ギリヤーク人、つまりニヴフ人のこと)の伝統住居展示・伝統生活実演に協力している。これは日本社会から見ればいわゆる「人間の展示」だが、ニヴフ民族側からみれば一種の外国旅行だったらしい。少なくとも現在の子孫たちにとっては戦後のソ連における民族音楽祭への参加などと並んで先祖たちの旅行体験として語られる傾向がある。
- 15) 山本祐弘 (1968) p214。当時はまだ「オタスの杜」は建設されていなかった。
- 16) クレイノヴィチ (1993) p217-219によればパルクジンはウルムクヴォヌグン集団である。
- 17) 彼女の名もやはり複数の語形が伝えられているが、おそらく *tojɯr'k* トイグシュク。
- 18) これもやはり結婚後に名乗ったものであろう。旧日本領南樺太以外で日本名がつけられた例はない。
- 19) 高橋盛孝 (1942) p97。
- 20) 高橋盛孝 (1942) では名前は記されていない。
- 21) 樺太庁敷香支庁編 (1932) によると当時の日本領内の民族人口はそれぞれウィルタ人346人、ニヴフ人113人である。
- 22) ヴィノクロフに関してはヴィシネフスキー (2006) に詳しい。
- 23) 山本祐弘 (1968) p215。
- 24) 山本祐弘 (1968) p215。また、当時の新聞報道 (樺太日日新聞) などから。
- 25) 上村テイコによると、彼女の養父上村シニタロウは「ヴィノクロフは日本人に殺された」と言っていたという。
- 26) 正確な事情についてはよく分からない。現在伝えられている通り戸籍が問題で乗船できなかったのか、たんに脱出希望者が多く乗り切れなかっただけなのか、いくつかの可能性が考えられる。8月23日にソ連軍による移動禁止令が出され、その日の夜に最後の脱出船が出港しているので、時間的には間に合っていたはずだと思われる。
- 27) 山本祐弘 (1968) p215。
- 28) 高橋盛孝 (1942) p97。
- 29) ニヴフ民族の伝統的な婚姻制度では交叉イトコ婚が優先される (強制力はない)。奥田長次はパルクジンの娘の配偶者候補だった。そういう場合は同一カル出身でなくとも庇護対象となったであろう。
- 30) 理由は必ずしも明確ではないが、現在でもこの傾向は強いようである。
- 31) チルウンヴドとポロナイスクではよく似た方言が話されていた。差は小さいが奥田長次は両者の違いをかなり明確に認識している。
- 32) 田中了・D・ゲンダーヌ (1978) によれば、戦後のウィルタ民族の「引き揚げ」に際しては「従前、樺太または千島に本籍を有していた者で、戸籍に記載されていない場合」の「就籍」という形で日本国籍の取得が認められた (p158)。北川ゲンダーヌは出自を隠していたが、他のあるウィルタ人は出自を隠さずに就籍している (p161)。
- 33) 田中了・D・ゲンダーヌ (1978) p155によれば、たとえば中村千代らは息子との再会のために日本に



来た。中生勝美（2002）によれば当時、逮捕者の家族には事情が知らされていないかったらしい。現地におけるこの見解は筆者の調査でも確認できた。

- 34) 戦争終結前からサハリンを脱出していたニヴフ人もいたが、多くは戦後に移住している。
- 35) それらの処分を受けた人々の一部はソ連崩壊後、名誉回復の対象となっている。
- 36) したがって「オタスの杜」だけでなく敷香町管区の出身者はいずれも引き揚げ時には、民族にかかわらず（いわゆる「日本民族」も含めて）、自己申告および周囲の証言により戸籍を確認しただけのことが多かった。
- 37) これはたんに「無視されていた民族が正しく認識された」ということではない。ソ連体制は各地の地域住民を言語集団ごとに「民族」という行政上の単位とした。それらは例えば伝統的な社会的単位である「氏族」（ニヴフ語では「カル」と呼ばれた）とは異なっていた。前近代の毛皮交易の主体は「氏族」であったが、ソ連体制下の毛皮流通を担ったコルホーズでは「民族」が重要な単位となった。一方でソ連体制が認めた「民族」は必ずしも言語間の差異の大きさを考慮して設定されたわけでもなかった。例えばウリチ語とナーナイ語の間の差異と、ニヴフ語アムール方言とサハリン方言の間の差異のどちらが大きいかについては議論の余地がある。清代から現代にいたるまでのアムール・サハリン地域の民族名称と地域住民の変化などについては、佐々木史郎（2001）が詳しい。
- 38) 2005年～2009年に行ったポロナイスクでの聞き取り調査によれば、オタスに住んでいたニヴフ人たちの一部はソ連時代に海岸沿いの漁場に配属されたようである。
- 39) ポロナイスク博物館のスヴェトラナ・サンギ館長によれば、当時のロシア国籍認知に関してニヴフ人出身の民族学者Ch・タクサミが尽力したとのことである。
- 40) ポロナイスクのニヴフ人たちと「引き揚げ」ニヴフ人とは「同一カル集団」内でも連絡が途絶えている。「引き揚げ」者の中で連絡を取り合っているかどうかは不明である。
- 41) ウィルタ人が主体だが、ニヴフ人とナーナイ人も参加し、当初はウクライナ人が代表を務めていた。その名称はナーナイ語による。ウクライナの民族音楽運動がサハリン島はじめシベリア諸地域に与えた影響については今後の研究課題である。
- 42) いわゆる「ニヴフ語正書法」は海岸地方の下位方言によっており、チルウンヴドおよびポロナイスク方言の話者からみると違和感があるらしい。
- 43) ロシア領側では彼の同世代でもニヴフ語が流暢に話せないニヴフ人は多かった。

#### 《参考文献》

- ヴィシネフスキー, N. 著 小山内道子訳『トナカイ王 北方先住民のサハリン史』成文社 2006年
- 上原善広「気の毒なギリヤーク人」『g2』vol.4 講談社 2010年
- 葛西猛千代『樺太土人研究資料』私家版 1928年（1975年の復刻版を使用）
- 樺太アイヌ史研究会『対雁の碑 樺太アイヌ強制移住の歴史』北海道出版企画センター 1992年
- 樺太庁敷香支庁編「オロツコ土人調査其他」1932年（谷川健一編『北の民俗誌 サハリン・千島の民族』日本民俗文化資料集成第23巻 三一書房 1997年 所収）
- クレイノヴィチ, E. A. 著 榎本哲訳『サハリン・アムール民族誌』法政大学出版局 1993年（原著は1973年）
- 佐々木史郎「近代アムール川下流域と樺太における民族分類の変遷」『国立民族学博物館研究報告 26巻 1号』国立民族学博物館 2001年
- 高橋盛孝『樺太ギリヤク語』大阪朝日新聞社 1942年
- 田中了・ゲンダース, D.『ゲンダース ある北方少数民族のドラマ』現代史出版会 徳間書店 1978年
- 田村正人「樺太庁による樺太アイヌの集住化」『千葉大学ユーラシア言語文化論集 第5号』千葉大学言語文化論講座 2002年
- 田村正人「日露戦争前後における樺太アイヌと漁業の可能性」『北方の資源をめぐる先住者と移住者の近

- 現代史 2005-07年度調査報告』 北海道開拓記念館 2008年
- 丹菊逸治・荻原真子「千徳太郎治のピウスツキ宛書簡」『千葉大学ユーラシア言語文化論集 第4号』  
千葉大学言語文化論講座 2001年
- 中生勝美「サハリン先住民の民族誌再検討：オタスの杜の戦前・戦後」『北海道立北方民族博物館紀要』  
第11号 北方民族博物館 2002年
- 北方民族博物館『Northern Peoples 北方民族ををするためのガイド』北方民族博物館 1995年
- 山辺安之助著 金田一京助編『あいぬ物語』博文館 1913年（金田一京助『金田一京助全集』第六卷  
三省堂 1993年 所収）
- 山本祐弘『北方自然民族民話集成』相模書房 1968年
- Grant, Bruce *In the Soviet House of Culture : A Century of Perestroikas*, Princeton University Press, New Jersey. 1995
- Гашилова Л. Б. Картинный словарь нивхского языка (сахалинский диалект), СПб, 2003

---

〔たんぎく いつじ・和光大学表現学部総合文化学科非常勤講師〕